

就寝前の楽しみに、寝そべりながら読む昔の『暮らしの手帖』がある。1980、90年代のものだ。先日その本棚の間から、小学校6年生の文集“琴の糸”が出てきた。

文集の最後に担任の先生の「あとがき」と「奥付」がある。奥付の日付は1954年3月20日編集・3月25日印刷。何と西暦で書いてあり、卒業式ぎりぎりだ。そして編集委員に自分も名を連ねていた。

先生の「あとがき」からは、文集に載せたのは子どもたちひとり一人自筆の詩・短文と版画で、編集委員が卒業式直前にガリ版刷りで完成させたことがわかる。また文集名は“琴の糸”、「あなたたちが町中を通る時、ポロンポロンと琴の音が流れてきたのを聞いたことがあります。心の糸にふれた感動が、あるいは詩に、あるいは版画に表れています。・・・お互いの心にふれあうことと思います」と先生の言葉。最後は「自分の信ずる道を雄々しく行ってもらいたいと思います」と結ばれていた。

文集“琴の糸”の編集は、戦後すぐの朝鮮戦争が休戦になった1953年7月の半年後のことであり、戦後すぐの食糧難が朝鮮戦争特需もあって良くなってきた時期でもあった。

その文集は、見事に当時の生活の様子をよく現わしている。

まずはみな豊かなお金やモノのある暮らしではなかった。教科書もお古があればそれを使い、なければ購入のようだったことがわかるが、それすらお古が手に入るぎりぎりまで待っていたこと、「買って」と言ったら親に殴られた。また、「お前もローラースケート（の靴）がほしいが、お金がないで買ってやれんな」としょげた声で（親が）言ったなど、そんな話が多い。私のもそう、全文を紹介する。

#### 恵那の子供

放送で「恵那の子供」という作文の本をほしい人は百二十円で学校で売りますといった。私はすぐ買おうと思った。だがそのことはきえた。今のお金のない時にどうして買ってもらえるだろう。母にたのめば「いけない」というだろう。父ならなお更だ。家にかえて、なんともいおうと思った。だけど、とうとういわずに二、三日たった。十名位の人が本を買った。セロハンにつつんだ厚い本だった。私はそれを見ると、うらやましかった。一週間位たったある日、母に「母ちゃん、恵那の子供買ってもらおうと思ったけど、どうせ買ってやれんで思ってたやめた。」といったら、「買ってやれんで、そのほうがよかったけ」と、たるそうにいった。私はいわなくてよかったと思った。

註：（）内は筆者。「け」「たるそうに」は、岐阜県東濃地方の方言。

またお金がないだけでなく、子どもたちは兄弟姉妹の世話や家事をやっている様子もわかる。私もご飯を炊いたりおかずをつくったりは日常茶飯事、家業（製糸業）の仕事も手伝っていた。本好きだったが、本を読んだり勉強をやっているのが長引くと叱られるの

で、こたつや布団で隠れて読んでいたのを思い出す。家業の製糸業は、繭から生糸を作るのだが、「出し杵」と言って、紡ぐ器械は働く人の自宅に置き、糸を木杵に束ねたものを持って来てもらうやり方だった。それを我が家の小さな工場で糸の束にし、岐阜市の問屋に届けていた。繭の買い出しは父が長野県の木曾谷、塩尻の方の農家まで行き買っていた。乾燥した繭の中にいたさなぎは戦後の食糧難の時はたんぱく源としてイナゴなどと同様に食べていた。この仕事は春から晩秋の仕事だったため、そのほかの時期は仕事なしというより“遊んで”暮らしていた。上述の作文中「お金がない時」というのはその時期を指している。

以上、今とは大きく違う昔の生活を紹介したが、その生活は季節の香り、草や自然界の生きものの匂いや味を思い出させてくれる。

約 80 年前と今の日本の暮らしや文化は大きく変わってしまった。

年を経た者が驚くようなこの生活の変化は、若者にとっては当たり前のことであろう。

しかし、今年になっても続き更に大きく拡大する戦争。科学の進歩・開発は、人の居所はじめすべてを明らかにし、権力者による武器の開発と侵略・人殺しを増大させている。

人に優先順位をつけ、貨幣価値にも強弱を設け、国に優劣をつけるのが、歴史を経て到達した今の人類社会のようだ。日本における女性の地位権利も、男社会優先の上に置かれたまま論じられている。

文集に見られる戦後すぐの教育には、教師たちの取り組みが大きい。恵那では生活綴り方教育が全国の中心となって取り組まれていた。型にはまった決められた文言でなく、自分の生活を自分の目で見、感じたことを自分の言葉で書くことが実践された。

今、「日本国平和憲法」「民主主義」は、日本に暮らす人びとに何を問いかけているのか。若者よ、黙っているな。

顔を上げ、話し合おうではないか。平和な世界を取り戻そうではないか。